

# 英語母語話者対象の日本語教育における 英語起源の外来語の扱い

佐藤 暁人

On teaching Japanese loan words from English in Japanese language  
education for native English speakers

Akito SATO

Gairai-go. Japanese syllables used for transcription of words from foreign languages (except old Chinese), is becoming more and more widespread as more and more foreign words are being adopted into the Japanese language. Though most of these words are originally derived from English, many of them have been transformed so much, both in sounds and meanings, that they can be confusing for foreign learners of Japanese especially native English speakers. They need additional explanation on the part of Japanese teachers to be understood.

Based on my empirical research conducted in the Philippines, this essay examines the influence of the mother tongue on their learning Japanese.

## はじめに

世界各国における日本語の学習者数は日増しに増加しつつあり、学習者の状況、動機、レベルは多様なものになっている。加えて日本人自身の日本語に対する興味・関心の高まり、日本語を見つめ直す各種メディアの動きや政府によるキャンペーンも繰り広げられている。

本稿では、このような日本語を取り巻く環境の中での“外来語”の存在意味を検証する。日本語には、特定分野の専門家のみが使用する特殊な用語から、完全に日本語化して“外来語”であったという認識さえ消失しているもの、未だ耳慣れないものまで“外来語”が溢れている。広範に浸透している“外来語”の存在は日本人にとって日本語に表現の幅を与える歓迎すべきものなのか。出自の多くが英語である“外来語”は英語母語の学習者にとってはどう存在しているのか。

そもそも“外来語”の研究は、大正時代の新村出(1944)らの語源研究に始まり、昭和に入り荒川惣兵衛氏(1943)、楳垣実氏(1963)らによってまとめられている。その後、石綿敏雄(1979)などによって体系化が進められ、同時に細分化されてきた。また日本人に対する国語教育ではなく、外国人に対する日本語教育という観点から、異なった見方、考え方が生まれている。石田敏子(1988)は教育者側の視点で、彭飛(1988)やプレム・モトワニ(1991)が学習者側の視点で日本語教育の研究をしている。

本稿ではこのような研究業績を踏まえ、“外来語”教育を英語母語話者対象の日本語教育の中で位置付ける。日本語学習者にとって“外来語”は学習の補助となる歓迎すべきものなのか。研究テーマを英語母語話者に限定し、本稿作成にあたりフィリピン、ビサヤ地方のセブ島の学習者を対象に現地調査を行った。彼らは日常会話ではセブアノ語を、筆記では一部フィリピン語を使用しながらも、英語の使用率が非常に高く、書簡を英語で書くなど、英語運用能力は高い。そこで彼らを複数言語を使用できる英語母語話者として捉え、本稿の研究対象とした<sup>1)</sup>。

## I. “外来語”の歩みと視点

本章では現在の日本語で頻繁に使用されている外来語の歴史的変遷とその現状を言語学と日本語教育の双方の視点から考察する。

### I-1. 言語学にみる“外来語”

本節では、本稿を通して扱われる“外来語”が、日本語を母語とする我々にとってどのような意味を持っているかを言語学的な視点から考察する。

そもそも“外来語 (foreign word)<sup>2)</sup>”という言葉には2つの意味がある。1つは“借用語”(“loan word”)と呼ばれるある言語から別の言語へ取り入れられる外国語を含めた言葉を表わす場合であり、もう1つはヨーロッパ諸言語をはじめとする外国語をカタカナで表記するものである。この際の“外来語”の中には、近代音による中国語も含まれている<sup>3)</sup>。では、“外来語”の受入側と貸出側の間にはどういう借用現象がみられるのだろうか。

まず、借用の起こる経緯からまとめておきたい。アメリカのLeonard Bloomfieldはその著書(1933)において、文化借用(cultural borrowing)、密接借用(intimate borrowing)、方言借用(dialect borrowing)の3種類に分類している。文化借用はある文化が別の文化の諸現象(宗教や慣習など)に接触することで、主に語彙面にのみ起こりうる現象とされる。密接借用は征服や移民などの結果から地理、政治的に単一の共同体の中で2つの言語が使用されている時に起こるものである。方言借用は1つの共通な言語の方言間で起こる現象である。方言借用は既出の2つの借用の側面を併せ持っており、特に密接借用的側面で捉えた場合に威信借用<sup>4)</sup>という現象が起こるとしている。

この3種の借用の分類を日本の歴史的経緯に当てはめてみよう。第一の文化借用では、先述の通り日本は歴史的に中国と強い繋がりを持っており、様々な影響を受けている。貸出側はその後、時代と共に欧米諸国へして変化いくのが、この中国からの借用では、漢字という文字の流入を特徴とす

る。現代に置き換えれば、英語をはじめとする諸外国語の流入がそれに当たるものと考えられる。

第二の密接借用の事例として次の二つを挙げておこう。一つは、琉球人や九州地方の隼人、東北地方の蝦夷やアイヌなど、異なる文化をもった人々を「征伐」し、「大和言葉」を強制した事象が挙げられる。別の事例が、両大戦間期から終戦に至る時期の日本勢力圏下諸国への日本語教育の強制である。これらの土地では現在でも日本語を使用できる年配の人々が存在しているが、日本帝国主義の残滓と捉えられている。

第三の方言借用に関しては古代から中世日本では当時の中央政権のあった関西地域の言葉が日本各地に波及していく状況に当てはまる。現代においても東京などの首都圏で使用されている言葉が各種メディアを通して全国に広まっており、この形の借用が生じ続けていると言えよう。

最後に、借用が起こる要素についても触れておこう。ここでも「音の借用」、「形式の借用」、「意義の借用」の3つに分けられる。まず「音の借用」であるが、日本語は音節構造が比較的単純であるため、英語などの諸外国語を採り入れる場合には新しい音素の組み合わせを作る必要が生じる。「ティー [ti:] (tea tee)」、「ディスク [disuku] (disk)」<sup>5)</sup>、「ファン [hwan] (fan)」などの音がこれに当たる。「形式の借用」に関しては、音訳又は直接借用と呼ばれる。本稿では漢語を除いたカタカナ表記の“外来語”のみを指すこととする<sup>6)</sup>。「意義の借用」は上記の「文化借用」の中で発生するもので、意味範囲の拡大と新語の創造に分かれる。これに関しては次節で現状を含め詳述する。

## I-2. 日本語教育にみる“外来語”

本項では日本語教育における“外来語”の意味を考察する。

まず近代の日本語教育の変遷を見ておこう。石田敏子（2000）の4つの時期区分が一般的である。即ち①近代、②明治初頭以後、③第2次大戦～80年代、④1990年代以降である。

## 明治前の日本語教育

近代日本における日本語教育であるが、16世紀に来日したポルトガル人宣教師が日本語を学び、文法書や辞書を作成している。海外でも、19世紀半ばに開国要求のための対日政策としてヨーロッパで日本語教育が始められた。

## 明治時代以降の日本語教育

日本人により外国人に対する日本語教育が始められたのは日清戦争終結後であり、対象は中国人留学生<sup>7)</sup>であった。しかし「漢字圏の学習者であったため国語教育の延長という感が否めなかった」[石田、44頁]。非漢字圏の人々への組織的教育は1900年以降に東京外国語学校で始められた。以降、宣教師のための日本語学校が開設され、語学将校や大使館員への日本語教育<sup>8)</sup>が行われた。

## 日米戦争期の日本語教育

第2次大戦前から戦中に関しては、日清、日露両戦争後に同化政策の一環として日本語教育が行われ、戦中には東南アジア諸国でも日本語教育が開始された。

また、日米戦争中の米国における日本語教育は、戦争中の情報収集と戦後の占領に向けたものであった。

## 戦後の日本語教育

戦後、特に高度成長期以降は、日本経済の発展に平行するように日本語学習熱は高まり、来日する留学生の数も増加していった。同時期、諸外国でも相次いで日本語コースが正規の教育機関に設立されていった。この頃の日本語教育全体の動きとして戦中の反省から日本主導の強制的な教育ではなく、現地のニーズに合わせて指導していくものになっている[石田、49頁]。

90年代以降、世界の日本語学習者数が急増し、学習動機も多種多様な様相を見せる。指導する側もそのニーズに対応するような指導カリキュラムの作成を求められることになる。国内における学習者層は大学準備コースに最も多く、次いで大学などの留学生、研究者、ビジネスマンなどと続い

ている〔石田 49頁〕。海外では初、中等教育機関での学習者数が最も多い。これは東・東南アジア、大洋州の15カ国で日本語が必修の外国語になっていることが学習者数の多さの一因だろう。

### I-3. 教育現場における“外来語”

次に、実際の教育現場で“外来語”がどのように捉えられてきたかを検討する。

日本語の語彙は、語種を2種類（固有語/在来語と借用語）に分類される場合と3種類（和語、漢語、“外来語”）に分類される場合がある<sup>9)</sup>。1種の差は、既出のように借用語の扱いが広義と狭義の2種類に分けられることによる。本稿では狭義での“外来語”の（従って“外来語”を三種に分類する）立場で論を進める。

現在の日本語では主に和語はひらがなで、漢語は漢字、そして“外来語”はカタカナで表記される。ただし、テレビや雑誌、広告などのメディア媒体は見る側である我々に印象づけ、注目を集め、注意を促すために、表記の常識的なルールをあえて崩すこともある。見方を変えれば、このような通常と異なる表記をすることで見る側である我々の意識や感覚に変化が生じるのであれば、和語にはひらがな、漢語は漢字、“外来語”にはカタカナにするといった表記ルールが日本社会の中にしっかりと根付いていると考えられよう。

しかし、上記の「通常とは異なる表記」が日本語学習者にとって大きな障害になりうる。授業でこの表記のルールに則った形で教えられている言葉が異なる文字で表記された場合、入門段階や初級学習者などは全く別の言葉と認識してしまうことがある。つまり注意や関心を集めるための表記が初学者に誤解を招く危険性を内包しているということを使用する側とそれを当たり前のように享受している側がどこかで意識すべきではないか。その意識が無ければ、初期段階の日本語学習者は必要のない学習を行わなくてはならず、それが日本語に対する負の印象や学習意欲の喪失にもつながりかねないのである。

もう1つ表記に関して重要なのが、国外の学習者にカタカナの学習意義や必要性をしっかりと伝えることである。国外の学習者はひらがなと同じ音と情報しか持たないカタカナの必要性を軽視し、“外来語”をひらがな表記で代用してしまえば効率が良いと判断することがある。それが一般的な日本語の使用実態から外れたものであり、日本社会や日本人に対して通用しづらいということを指導しなくてはならない。この点において日本国内での学習者は生活圏にカタカナ表記の言葉が溢れている状況を体験しており、意識の上での問題は少ないと考えられる。

## Ⅱ. 今日の日本語に見る“外来語”

本章では近年懸念される“外来語の氾濫”の実態を国立国語研究所の外来語の調査結果と第19期国語審議会の記録を元に検討する。現在市販されている日本語教材の内容も併せて検討し、学習者の直面する問題を考える。

### Ⅱ-1. 日本人の“外来語”

国立国語研究所が「国語に関する世論調査」の中で「外来語の定着度調査」(2002年)を実施した。国内で問題視されている“外来語の氾濫”の現状に関する調査である。理解率、認知率、使用率と3種類の項目がたてられた。各項目で順位こそ異なるが上位3位となったのが、「ストレス」、「ボランティア」、「リサイクル」の3語であった。これらが現在の日本社会に最も馴染んでいる“外来語”であると考えられる。特に「ストレス」は3項目全てにおいて1位であり、かつ回答率が90%を超える唯一の言葉でもあった。

筆者は、これらの言葉の使用法をインターネットの検索サイトGoogleを使用して調査した。使用言語を日本語のみとし、検索範囲をwebページの本文のみに限定した上で検索を行った。表1はその検索結果をまとめたものである。

表1 定着度が高いとされた“外来語”のネット上での使用状況

	総該当件数（件）	閲覧可能数（件）
「ストレス」	2,570,000	869
「ボランティア」	1,970,000	883
「リサイクル」	2,700,000	990

「閲覧可能数」とは、システム上1次検索キーワードに加えより細かく検索するための2次キーワードを入力する必要があるものである。この検索後にそれぞれの言葉の後ろに続く言葉を上位五語までまとめたものが表2である。

表2 二次検索の結果

	1	2	3	4	5
「ストレス」	～解消	～と	～を	～の	～に
「ボランティア」	～活動	～募集	～センター	～の	～情報
「リサイクル」	～ショップ	～の	～トナー	～法	～システム

この検索でそれぞれの語に続く言葉のうち“外来語”が占める割合を調べたところ、「ストレス」は94語中30語で約32%、「ボランティア」は136語中44語で約32%、「リサイクル」が175語中63語で36%となった。どの語も3割前後の割合で“外来語”を伴って使用していることになる。この結果から複数の“外来語”を組み合わせ使用している実態をみると、いかに日本語への定着度が高さが垣間見れるだろう。

しかし、前述のような調査だけでは対象数が少な過ぎ、結論を導くのは難しい。そこで1989年に国立国語研究所が行ったテレビ番組（NHK、民放）内で使用される話し言葉の調査では、和語68.6%、漢語18.3%、外来語4.5%、混種語8.6%という結果があり全体から見るとあまり多くはない。ところが、番組のジャンル別にみるとF-1の実況中継やアイドルの出演している音楽番組、ファッション番組などは20%を超える割合を示している。他にも同種の調査が行われており、野村雅昭が1960年版と80年版



の『現代用語の基礎知識』を比較したところ、この間に増加した語の58.2%が外来語で、実質的語数は1093語にものぼった。ちなみに同調査で漢語が27.7%、和語は12.7%であった。もちろん『現代用語の基礎知識』が時代に即した言葉を主に取り上げるという性格を考慮すべきではあるが、それでも非常に多い数字である。こうしたことから日本人の“外来語”への依存度の高さと定着度の高さの理由が見えてくる。

## Ⅱ-2. 新たに出現した“外来語”

日本語の中の“外来語”は日々新たに生まれ、流入するが、全てが残るわけではない。近年は特に流入量が多すぎて、言葉の自然淘汰が追いつかず、日本語の中に溢れかえる状態にある。そうした状態を危惧する声上がる所以である。その中で国立国語研究所は公的機関や各メディア、そして日常生活なども考慮し、あらゆる場面で使用されている“外来語”176語<sup>10)</sup>をピックアップし、それらの“外来語”の言い換え案を作成し公表している<sup>11)</sup>。平成14年の外来語委員会発足以降現在までに4回の言い換え提案が提示され、詳細は国立国語研究所のHP<sup>12)</sup>で示されている。

リストアップされた言葉の中には、意味や使用法が分からない言葉や出自が和製語も含まれている。その中で理解率が「全体」・「60歳以上」双方で高い数値を示したのは、「デイサービス」、「ケア」「インパクト」であった。逆に理解率が低かったのは「アーカイブ」、「アウトソーシング」、「アイデンティティ」などの数語であった。理解率の高い言葉に対しても言い換えを行った方が良いのか。既に定着しつつあるならば、そのまま見守った方が効率的ではないか。準備は必要かも知れないが、日本語学習者にとっても日本人にとっても新たに覚えたり慣れたりする負担をあえて増やす必然性はないと考える。

“外来語”の一種としてカタカナで表記される和製語の存在についても見ておこう<sup>13)</sup>。これらは容易に日本語であると分かるものから、特定の業界の専門用語がそのまま広まったと思われるものまで多岐にわたる。こうした言葉は基本的に原語の文法体系<sup>14)</sup>を無視/逸脱し、日本語として見栄

えの良さや使い易さを得るために作られている。代表的なものに「ナイター」、「ホームドラマ」、「サラリーマン」など日常よく耳にするものから、上記の「デイサービス」や「アイドルングストップ」のような目新しいものまで様々である。こうしたものの中には日本人にとっても馴染みの薄いものもある以上、学習者にとっては更に大きな負担になることを教師は勿論、周囲の人も意識の片隅に置いておくべきだろう。

### Ⅱ-3. 日本語教材の中の“外来語”

ここでは前述した3語（ストレス、ボランティア、リサイクル）が市販の日本語教材の中で取り扱われているか、何時ごろ出現し、またこれら以外にどういった“外来語”が含まれるかを7冊のテキストで調べた。使用したテキストは国内でのシェアの大きい『みんなの日本語 1』、『みんなの日本語 2』、とそれに続く『げんき 1』、『げんき 2』である。更に比較のため、英語話者向けテキストである『Basic structures in Japanese』、『Japanese for Everyone』、『A course in Modern Japanese』である。その結果、『げんき 1』の読解の8課に「ストレス」、『みんなの日本語 2』の読解26課に「ボランティア」、同32課に「ストレス」が出ているだけだった。日本人に馴染みの“外来語”だが、日本語学習—特に初級段階—にはあまり必要性や魅力が無い言葉のようである。

7冊の教材で出てくる“外来語”の初出状況をまとめたのが表4である。

初期段階に学習単語として出てくるものは精神的、観念的なものよりも日常生活により密着した言葉が多いことが見て取れる。

この中で英語系の2冊にでてくる「アパート」、「レジ」、そしてドイツ語出自の「アルバイト」の3語に注目したい。これらは省略語であり、日本語特有の使用法をする言葉であるにも拘わらず1課などの前半部で既に学習単語に入っているということは教材作成者が日本国内での生活における使用を想定している表れだろう。他に教科書毎の総単語数に対する“外来語”数の割合を調査したところいずれの教科書も概ね10%前後となった。

表3 日本語教材に見る外来語

教材名	課数	“外来語”
みんなの日本語 1	1 課	エンジニア
みんなの日本語 2	1 課	デザイン
げんき 1 会話文法編	1 課	地名（ハワイなど）
〃 読み書き編	2 課	〃
げんき 2 会話文法編	13 課	アルバイト
〃 読み書き編	13 課	ホストファミリー
Basic Structures in Japanese	2 課	アパート
Japanese for Everyone	1 課	パスポート
A course in Modern Japanese	1 課	レジ

表4 日本語教科書ごとの収録外来語割合

教科書名	外来語数	収録単語数	割合 (%)
みんなの日本語 1	82	970	8.5
みんなの日本語 2	161	1700	9.5
げんき 1	109	1000	11
げんき 2	185	1900	9.7
Basic in Structures Japanese	157	1000	16
Japanese for Everyone	215	2300	9.3
A Course in Modern Japanese	84	760	11

次に学習者の多くが受験するであろう日本語能力検定試験の内容との関係を見ておきたい。旧検定試験形態の1級から4級において出題されたことのある外来語はおよそ500語<sup>15)</sup>、この中には英語以外にもフランス語やオランダ語、ドイツ語、和製英語等が含まれているが、約9割が英語出自のものである。入門レベルの学習者が受ける4級でも60語以上出題されることがある。実際に出題されているのは、やはりテキストにも出るような日常生活に密着したものである。上級レベルの1級では200語以上が出題

され、その中には、「する」を後ろに伴ったサ行変格活用動詞として使用されるものや、具体的なモノや動作ではなく、性格や概念なども含まれている。

#### Ⅱ-4. 国際社会の中の日本語

国際化の時代、日本への入国者数<sup>16)</sup>は年々増加し、国籍も多様となっている。それに伴い世界での日本語学習者数も増加している。それは日本語能力検定試験受験数の推移<sup>17)</sup>から容易に推定出来ることである。現在では全世界で30万人を超える人々がこの検定を受検しており、もはや日本語がただ国内にて日本人同士でのみ通用すれば良いという考え方は時代に沿わないものだと言える。

国語審議会の答申からもそうした状況に対処する姿勢が伺える。特に2000年の答申は「国際化に伴うその他の日本語の問題（第三項）」として“外来語”に焦点を当てている。まず挙げられているのは日本語内における“外来語”・外国語の増加の問題である。この中で既に日本語として定着している言葉—ラジオ、テレビ、トイレなど—や、ある特定の分野の専門家間で使用する言葉—オゾン、インフラなど—、“外来語”や外国語にすることでイメージの変化を図る場合の職業名といった言葉はそのまま使用できる場合が多いが、新たに流入した言葉で明確な情報を与えにくい言葉が急激に増えていることが問題だとしている。そのような言葉が増え続けると「高齢者層とそれ以外の年齢層の間での意思疎通が図りづらく」なったり、「日本語を介してのコミュニケーションが阻害」されたり、「伝統的な機能を有する和語や漢語の軽視につながっ」たり、「日本人と外国人双方にとっての言語学習の妨げにもなる危険性」があるとしている。中でも注目したいのが言語学習に与える影響である。“外来語”の増加は、外国人学習者にとって学習項目の増大に直結する問題であるばかりでなく、日本人の外国語学習者の学習を阻害する—国内で使用している“外来語”・外国語が新規学習言語の習得を阻害する—と言われている。先述した通り、現在使用されている“外来語”・外国語の多くがその出自となっ

た言語との間に意味のずれや拡大・縮小・変化が生じている。また日本国内では当たり前のように使用されている言葉が実際は和製語であるため、その原語では全く通用しない場合もある。このような観点からも外国語・“外来語”が単に増加するだけの状態を見直す時期が来ていることが分かる。

## Ⅱ-5. “外来語”と外国語

現在の日本語内の“外来語”は前節末にあるように、その表記にゆれ幅や省略があると同時に、意味も原語より縮小・限定されたり、全く別のことをさす場合も出てきている。ここではそうした“外来語”と外国語の関係について検討する。

この中で「表記がゆれる」という点に着目すると、長音記号をつけるか否か、「ヴァ」か「バ」かといった違いがある。「モニタ」と「モニター」、「コンピュータ」と「コンピューター」、「ヴァイオリン」と「バイオリン」、「コミュニティ」と「コミニティ」などはしばしば見かける。意味が原語と異なる言葉も多い<sup>18)</sup>。例えば若者言葉やテレビ、雑誌などのメディアで聴かれる「テンション (tension)」や「ダイエット (diet)」などは、表記のゆれは少ないが、意味に関しては、問題はそれほど簡単ではない。学習者が国内で生活している場合でも、それらの意味や使用場面を正確に理解するのは困難を極めるのではないか。

例えば、上記の「テンション (tension)」という言葉は原語である英語では「張る」というイメージで、強弱で表されるが、日本語では「上がる」「下がる」ものとして認識される。また日本語ではこの「テンション」の前に「ハイ (high)」をつけて「ハイテンション (high-tension)」とする表現がある。精神的な興奮状態を表すが、原語にはそういった意味は見られない。同じ意味を原語で言うならば「hyper」や「excite」が用いられる。確かに「ハイテンション」という表現は原語にもあるが、高压電線などに用いられる<sup>19)</sup>。他にも近年の国内での災害時などによく耳にする「ライフライン (lifeline)」という言葉がある。日本語では生活に必要な不可欠な電

力、水道、ガスなどの機能を指すが、原語では緊急救助の際の救命索という意味あいで使用されるのが通常である<sup>20)</sup>。また「ダイエット (diet)」という言葉も日本語では「減量」という観念の方が強く、原語にあるような日常的に口にする食物や、食事療法といった医療などに関わるイメージはあまり持ち合わせていない。

前章、本章を通して“外来語”の定義、分類とその歴史的変遷、そして現在のあり方を日本語母語話者と国内の学習者双方の視点で考察してきた。また、“外来語”の日本語における捉えられ方と日本語教育における捉えられ方も考察した。しかし、これはあくまでも日本国内という限定の上での考察である。そこで次章でこれまでの知見を土台に、英語を母語とする学習者の状況を、筆者の海外における現地調査を絡めた上で考察していく。

### Ⅲ. 海外における日本語教育事例とその中にみる外来語 フィリピン、セブ島での調査をもとに

以下は本稿作成にあたり、海外における日本語教育現場の一事例として2005年9月から10月に掛けての約1ヶ月間、フィリピン共和国ビサヤ地方のセブ島にて行った現地調査に基づくものである。調査方法として、後述にて詳細を記すが教育機関での授業及び教材の考察を主として行い、インタビューを実施した。

#### Ⅲ-1. フィリピンの言語事情

フィリピンには国語であるフィリピン語とタカログ語<sup>21)</sup>、セブアノ語<sup>22)</sup>など8大言語と呼ばれる主要言語があり、それ以外に少数派言語が数多く存在しており、全部で80種<sup>23)</sup>ほどの言語が使用されている。これら諸言語の多くはフィリピン諸語<sup>24)</sup>に属し1つの言語が起源とされているが、これら諸言語の多くは現在では共通の意味の単語がわずかに見られる程度の類似性（厳密に言えばニュアンスや印象、使用場面などが異なる）が残されているだけで、それぞれの言語の独自性が強くなっていて、相互の互換

性を求めるのは不可能な状態にある。このような現地特有の土着語以外に、フィリピンでは英語も日常的に使用されており、公的文書は全て英語ないしはフィリピン語で書くことが通例となっている。

今回調査に訪れたビサヤ地方セブ島では、日常生活においてセブアノ語（ビサヤ語とも呼ばれ、両言語は若干異なる部分を有するため区別されることもある）と英語、フィリピン語の3言語を併用している。しかしこの3言語、特にセブアノ語に関しては現地の人々は日常会話での使用、つまり話し言葉としての使用がほとんどで、筆記するのは簡単な名詞や指示表現だけである。現地の人々に言わせればセブアノ語は会話でコミュニケーションするための媒介であり、筆記には英語を使用すれば良いと考えられている場合が多い。そのため近年ではビサヤ語を使用してきた年配の人でさえ複雑な表現の文章をビサヤ語では書けなくなっている。彼らは、話し言葉で書かれる日々のメールや手紙といったものから、書き言葉による公的文書作製まで、幅広い範囲で英語を使用している。彼らの英語の運用能力が非常に高いものであるといえる。

このように英語以外の言語を日常的に使用しながらも、英語を自在に使用することのできる彼らは本稿の研究対象に相応しいと考え現地調査の地として選んだ。以下はその調査にて得られた情報とその考察である。

### Ⅲ-2. 現地における日本語教育の現状

現地における日本語教育の状況を調査するにあたり、規模が大きくまたセブ島でも最も歴史の長いサン・カルロス (Sun Carlos) 大学 (私立) と、極めて小規模で個人の運営しているボランティアの新しい日本語教室という、対照的な2つの教育機関を訪れた。

まず現地の日本語教育の現状を概観しておきたい。顕著であったのは、教材の貧しさである。大学では、教師が日本国内の日本語教育機関（日本語学校や大学など）で学習した経験があり、かつて彼らが使用していたテキストをコピーして学生に使用させていた。しかし、教師が学習していたのが20年以上前であることも多く、現在と比べるとテキスト内の文章表現、

文法説明に若干変化が生じていると考えられる。個人の教室は学習者のレベルがばらばらで、初級以前の入門段階の人も出席しているため日本から取り寄せたテキストだけでは不十分で、教師が自作のプリントを用意し、日本語の基本となる仮名の読み方、書き方などといった基礎な訓練をしている状態にあった。

書店で市販されている教材<sup>25)</sup>についても、大半が1対1の意味の対応形式の単純な辞書であったり、日本に滞在する人用の日常生活用語、会話用例集や旅行用会話練習本であった。動詞の活用を集めた教材らしきものを見かけることもあるが、こうしたものは非常に高価で、現地の人々の一般的な収入では容易に購入できる価格ではない。独学での習得の難しそうなものも多く、加えて、こうした書籍のほとんどに日本語の文字、つまり“漢字”は勿論“ひらがな”や“カタカナ”さえ使用されておらず、日本語に相当する部分がヘボン式ローマ字表記<sup>26)</sup>によって記載されているものが圧倒的に多い。

日本語を独習する点でもう1つ問題なのが市販されている視聴覚教材である。日本語に限らず外国語を独学で聴解練習をする、すなわち“聴く”訓練をする教材が全くといっていいほど見当たらない。こうした点を鑑みると、訪問した私設の日本語教室の場合は教師が母語話者（日本人）であるため学習者が自然な発音を直に聞く機会は十分に与えられており目立って大きな問題がないが、今回の調査対象となった大学の日本語の授業の担当教師の多くは現地人であった、彼らの発音やアクセントにはやや違和感を覚える場面が何度かあった<sup>27)</sup>。そうした誤りの中には母語の音韻体系の影響と考えられるものが至るところに散在しているように思われた。

### Ⅲ-3. 学習機関以外にみられる日本語とその明暗

今回調査を行った、現地教育機関以外の人々の日本語についてであるが、彼らの多くは若干の日本語に関する知識（単語レベル、特に挨拶や返答の決まり文句）を持っていることが多い。彼らの職業柄日本人に接し、生の日本語を聞く機会が得られるためであったあり、親族や友人に日本人がい



たりするためである。しかし率直に言えば、そうした彼らの日本語の運用レベルは高いとは言い難い。彼らの中には日本人旅行者などを相手にジョークやユーモアを交えながら会話のやり取りが出来る人も存在している。調査中の印象に強く残っているものに、ある現地人ガイドとのやりとりがある。彼は旅行者に「いつも仕事をたくさんしているから、もうすごいお金持ちだね」と言われて、すかさず「いえいえ、私はお金待ちですよ、ほんとに」と笑いながら返事をして日本人の笑いを誘っていた。

彼が日本語運用能力を習得したのは、現地で市販されている現地人用サバイバルジャパニーズの本を片手に日本人旅行者に積極的に話しかけコミュニケーションをとることで、文章の用法やアクセント、ニュアンスを1つ1つ学びとっていくという実に根気のいる作業の繰り返しののだという(?)。彼曰く、日本人客は旅先という状況と外国で日本語を聞いた嬉しさからか、拙い日本語にも比較的丁寧に返事をしてくれたり、誤っている箇所を訂正してくれたりするという。

この例に挙げたようなガイドの場合、目的はある程度充足されているのかも知れない。だが、一段上の日本語学習を目指す場合は、市販されている教材のように日本語の文字の一切記載されておらず、処々に誤植のあるテキストを使用して学習していくことは後々多くの問題を残すのではないだろうか。つまり、こうしたジョークやユーモアで会話できる人々でも“聞く”、“話す”の2技能は堪能であっても、“読む”、“書く”に関しては全く出来ない。今回の調査に限って言えばこのガイドのような人々が圧倒的に多かった。特に“書く”という技能、技術に関しては出来ない人ばかりが目についた。日本語を“書く”ことが必要とされないため彼らも練習しようとしないうえ、練習して仮に書けるようになったとしても、それが正確なのかどうかを判別する手段が無いということで、練習も中途半端のまま放置してしまう場合が多いようである。

上記のようなサービス業に従事している人々のもう1つ別の事例として、現地の日本食レストランの店員にみられる日本語の習得方法があった。それは徹底した一音一音、一文一文ごとの反復暗誦練習である。レストラ

ンのオーナーの意向で接客用語、作法を日本の同業種のスタッフと同程度のレベルにするべく、全ての従業員に開店前に繰り返させているとのことである。接客用日本語と対訳英語リストを作成し動作付で練習させている。これ以外に日本語を1音1音明確にさせるために、放送業界などでもよく見られる割舌のトレーニング（1音ずつずらして読む訓練など）を開店前に1～2時間毎日欠かさずに行っているという。このような人々の日本語の習得は、総じて4技能（話す、聞く、読む、書く）全てを満たすものではないが、接客用という一点においてコミュニケーションをとるための言葉としてのその機能を十二分に満たしているものと考えられる。

またフィリピンという国は出稼ぎ労働者が非常に多い国でもあるが、そうした状況が招いたもので“ジャパユキさん”という言葉が生み出された事実がある。タレントという名目で日本に來日した数多くの人々が日本で生活しているうちに身につけた日本語を本国に戻った後も使用する、または周囲もそれを聞き覚えるという形で日本語が広がっていくことがある。そうした日本語は女性が男言葉を使用したり、誤った発音のまま広まってしまう、など誤用が多い。勿論、先述の旅行ガイドやレストランスタッフなどフィリピン国内で日本人を相手にする仕事に従事している人々の間でもそうした誤りが無いわけではない。一度そのようにして広まってしまった誤った日本語は、そう容易には正しい形の日本語に直されることなく誤ったままの姿の日本語がその地に残ってしまうのである。

#### Ⅲ-4. 母語による日本語の発音への影響

本節は先述の現地日本語学習者の母語による影響について考察する。

現地使用言語は主に土着語のセブアノ語またはビサヤ語で、公用語である英語とフィリピン語、特に英語は筆記で使用される場合が多い。言語類型的にはこれらの言語はフィリピン諸語に属し一つの言語が起源とされている。また、これらの言語は国の歴史的背景<sup>28)</sup>によりスペイン語の影響を色濃く受けている。

音韻体系として基本母音は“a”、“i”、“u”の3つであるが、スペイン語

からの借用を加えた場合“e”、“o”の2種類が加わりスペイン語と同数<sup>29)</sup>になる。子音の数は日本語より5つ多い14種類 (p, t, k, b, d, g, m, n, ng [ʔ], s, h, r, l, [ʔ])<sup>30)</sup>である。こうした音韻体系の言語使用者が日本語を発音する際の問題になるものの一つに日本語の母音の“i”と“e”、“u”と“o”の2種類の音の区別である。これら2種類の音を彼らに発音されても日本人は区別できないことが多い。大学などの教育現場でも一音一音ごとの発音であるならば、その都度教師が誤りを見つければ適宜指導して改善させることは比較的容易であるし、一般的な会話の場合はそれまでの流れから誤用であったとしてもある程度予測することはできる。しかし、彼らからこの単語の発音が正しいか否かを尋ねられた際、まず媒介語を使用して意味内容の確認が必要になる。1つの文として発話された場合にも、その中の言葉や何を言いたいのかを確認しつつ、発音やアクセントを教える必要がある。この母音の判別が難しくなって聞き取りにくくなる現象の具体的な単語例として、[にく] [niku] ⇔ [ねこ] [neko] となったり、[かぎ] [kagi] ⇔ [かげ] [kage] と発音してしまうのである。

2つ目の問題に、日本語の発音に際し“h”の音の欠落が目立つ。特に語頭に“h”の音が来た場合は頻繁に欠落する。これは英語などの言語に見られる特徴であり、また彼らが日常的に英語を使用しているために起こり易い誤りではないかと思われる。日本語で言えば、[ひやく] [hyaku] が [やく] [\_yaku] と聞こえてしまう。同様に、韓国人学習者などにもみられる傾向だが、つ (tsu) の音が“ちゅ (tʃ) ”、“い (i) ”の母音”の後に“え (e) ”の母音が連続する場合に通常とは逆になるが一種の母音調和を起こし前の母音が後ろの母音に引っ張られて変化する。例とこともある。“にねん (ninen)” が “ねねん (nenen)” となってしまうのである。

### Ⅲ-5. 母語の影響の可能性

前節にて表出したセブ島の学習者の日本語の発音での問題点を踏まえた上で、英語のみを母語とする学習者が日本語を、特に“外来語”を発音、使用としたときどういった問題が表出するのかを考えてみる。

外国語が日本語の“外来語”としてのかたちを得るまでの経過

例：bag(bæg)      [      b      æ      g      ]

1. 開音節化      u

2. 促音の挿入      Q

3. 母音の日本語化      a

4. 子音の日本語化      b      g

5. アクセントの日本語化

            
b | a      Q      g      u

6. カタカナ表記      バ      ッ      グ

7. 促音の後続子音の

無声化      ク

8. カタカナ表記完成      バ      ッ      ク

日本語教育指導参考書16 外来語の形成とその教育 3章より抜粋

そもそも外国語—ここでは英語—を“外来語”に変化させるには、幾つかのプロセスを辿る必要がある。まず日本語と英語では音韻体系が開音節 (open syllable) と閉音節 (close syllable) と異なるため、日本語化するために元の英語の言葉を開音節化する必要がある。また、学習者が直面する問題に子音と母音の数の違いがある。英語と比べ日本語は子音、母音が少ないため、本来は異なるはずの音を強引に日本語に合わせ変化させる必要がある。例えば、日本語に“l”と“r”の音の区別が無いのに対し、原語である英語には“l”と“r”を持つ言葉—「light (l?it)」と「right (r?it)」など—が数多くある。しかしこれらの言葉を日本語に変化させればどちらも「ライト (raitto)」と“r”で表記するラ行の音で表記され同音異義語として扱われるの。このような子音の変化によって生じた言葉は英語を母語とする学習者からすれば、本来全く別の意味を持っていた別の言葉が同じ表記、同じ音に変化してしまうため、使用に際しての困惑は避けられない。

### Ⅲ-6 セブ島の学習者の場合

英語のみを母語とする学習者の日本語の発音への問題を見てきたが、セブ島の学習者のように英語以外にセブアノ語やフィリピン語も使用できる場合はどうであろうか。調査の際には特に目立った母語の影響は発見できなかった。単に筆者が耳にしなかっただけだという可能性もある。日本語を発音する上での問題点が見つかった以上、同じ日本語の音韻体系の中にある“外来語”も既出の障害または新たな障害に直面するはずである。しかし、耳にしなかったという事実も考え方によっては、彼らの使用する“外来語”が日本人にとって自然な日本語のように聞こえている可能性があるということではないか。

そこで上記の英語のみを母語とする学習者と比較する形で一つの仮定を設けた。彼らの“外来語”の習得（文字であるカタカナを覚えること）が困難だとしても、その発音が日本語として自然に聞こえ、かつ比較的容易にそれを行うことができると仮定した場合、その理由は一体どこにあるのだろうか。

この仮定に対するアプローチとして、彼らの使用する言語の音韻体系を比較する方法が考えられる。実際に比較してみると英語は一般的に閉音節（close syllable）に富む言語であるが、逆にセブアノ語は日本語と同様に開音節（open syllable）に富む言語ではないか。この根拠としてセブアノ語に影響を与えているとされるスペイン語は、開音節に富む言語と言われている。仮にそうだとすれば“外来語”が日本語としての形で表れるまでの経過のうち、最初の開音節化した状態に近い音の認識を彼らは既に持っている、もしくは作ることができると考えられないか。これは英語の言葉の音をセブアノ語的な音韻で捉えているということであり、最初から日本語の音韻で捉えているということではない。つまり英語を日本語の“外来語”として取り込むときと同様に、セブアノ語でも似たような方法を用いて“外来語”を作りだした上で、その音を認識している、という考え方である。

更に2次的アプローチとしてセブアノ語の文字の読み方がいわゆるロー

マ字読みに比較的近いという点に着目する。日本語への経過の3番目の母音の日本語化の際に幾つか統合される英語の母音があるが、そうした問題をクリアできれば彼らは、若干英語的アクセントが言葉によって残るかもしれないが、その時点で既に日本語の“外来語”に近い形で発音することができるのではないか。そのため、彼らが“外来語”を発音したものを日本人が聞いてもそれほど強い違和感を覚えずに受け入れることができるのではないか。また、仮にここまでで示したことが事実であるならば、英語を出自とするもので、なおかつ日本人が日常的に使用する“外来語”の存在はセブ島在住学習者にとって一特に初級段階の学習者の一会話表現において使用できる語彙量の増加に直接繋がるものである。同時に使えば使える分だけ日本語の表現の幅が広がるという側面も併せ持つと考えることもできるだろう。

では、冒頭に挙げた仮定が全く逆であったならばどうなるだろうか。つまり、セブ島在住学習者が話す“外来語”が原語である英語的発音やアクセントが抜けておらず日本人がそれを聞いてもおおよそ聞き取りづらいたまは聞き取れない場合に、それは一体どういった理由で起こるのか。またどのようにすれば、それを克服していけるのか。

この場合、英語を日本語化する際の手順を最初から順に踏んでいくことで学習者も日本語音での“外来語”を発音することはできるようになるだろう。しかしセブアノ語は母音の数が日本語より2つ少ない状態で認識されている場合もあり、仮にスペイン語の影響により彼ら自身が5種類と数えたとしても、この仮定をたてるに至った理由であった発音の判別の問題がある。先述の通り、彼らは“i”と“e”、“u”と“o”の区別がしづらい。そのため、まず学習者に日本語の母音の5つのそれぞれの音を聞き分け、言い分けさせる訓練が絶対的に必要となる。その際に注意したいのが、日本語にある同音異義語である。これは和語や漢語に限ったものではない。上に例にあるように「右」と「照明」の「ライト」は表記も音も1つなのである。他にも「手首」と「表、一覧」も「リスト」で、点火に使用する「ライター」と物書きの「ライター」という具合に1語で表記される“外来

語”は幾つかある。他にも、「ペン (pen)」と「ピン (pin)」など別物になってしまう“外来語”も存在する。勿論、これら全てを日本語で使用する訳ではないし、出自が英語の“外来語”であれば頻繁に起きる誤用ではないが、こういった言葉に対する知識と練習は必要だろう。その上で、日本語の発音や表記の練習をする方が良いだろう。

## まとめ

本稿では英語母語話者対象の日本語教育における英語起源の外来語の扱いについて国内外双方の視点で考察してきた。結論から言って国内外の学習者の置かれている状況を比較した場合、明らかに国内の学習者に対して“外来語”が供給過剰の状態にあると言わざるをえない。これら“外来語”は学習者を困惑させる可能性を多分に有する日本語の一要素であると考えられる。これは教育現場の内外を問わず当てはまることである。それでも教育機関側ではある程度の選定を図り、学習者への負担を軽減している。

教育現場が学習項目量を軽減しているという事実は、市販の教科書に見え隠れする作成者側の“外来語”に対する意図から推測できる。学習項目の内容が国内での実生活に密着したもの、日本人との対人関係を築く上で必要になると考えられる表現は積極的に盛り込まれているが、“外来語”をみだりに使用しないというような意図がうかがえるからである。国内の教育機関に関しては“外来語”に対する姿勢を明確な形で調べることは出来なかったが、指導参考書やインターネット上などに見られる様々なコラム、使用している教科書に掲載されている学習項目をもとにすれば、そこからあまりにも逸脱したカリキュラムが立てられているとは考えづらい。そうした点から教育機関側でもある一定の“外来語”に対する選定、線引きがなされていると推定されるのである。

そうなると供給過剰の明らかな原因となるのは日常の社会生活ということになる。国内で生活する学習者は嫌がおうにも経験する状況にある。周囲の日本人の会話や、テレビ、新聞、広告、雑誌などのメディア媒体を通して日々“外来語”を日々見聞きせざるをえない。彼らを取り巻く“外来

語”の状況は「氾濫」と呼ばれ、実際、政策として“外来語”の言い換え案が提示されてもいる。日本人の間でも新聞や雑誌の記事、テレビ番組などで日本語を取り上げる機会が増えており、全体的に日本語や“外来語”に対する見直しの動きが母語話者である日本人に頻繁に見られるようになっている。このことから膨大な量の“外来語”が我々の周囲に溢れている状況が浮かび上がる。

その一方で海外の日本語学習者に関しては、国内の学習者とは対照的に、周囲に“外来語”があまり存在せず、接する機会は圧倒的に少ない。しかし、その分学習者が得る“外来語”の語彙量が学習項目を選定する学校や教師に委ねられる形となり、全体としての不足は否めないが必要最低限を学習することができるだろう。教室や学校などの学習機関以外で“外来語”やその他の日本語を知る方法はインターネットや輸入書籍を購入するくらいしかない。他に機会は少ないが、日本人の友人などを通して日本語を学習することも可能である。このように個人の置かれた環境の違いは、“外来語”をはじめとする日本語の語彙量の差を生んでしまうのである。この差が、授業などで露呈することで学習者の意欲減退などの影響を及ぼすこともある。

また、国内外両者の環境の大きな差が露呈するものに日本語の発音の学習が挙げられる。国内であれば教師は日本人で、標準的な日本語の発音を直接聞く機会は当然のように与えられ、学習者が正しい発音を習得しやすい環境にある。その上、教師によって発音指導も適宜に比較的容易に行えるはずである。周囲の環境も全て日本語主体で、日本語漬けの生活を送ることで聴解力を鍛えることは容易である。だが、国外学習者の場合、全てが日本人教師の授業を受けている訳ではなく、発音の練習の点で不利が生じる。日本人以外の教師で、その教師自身の発音が日本語として不明瞭であった場合には、学習者が知らず知らずに誤った、もしくは日本人が聞けば違和感を覚えるような発音を正しいものとして習得してしまう。加えて、そうした教師からは発音の指導を受けることは難しい可能性がある。しかし、一見すると悪い面ばかりが目立ってしまう外国人教師の指導だが、



学習者からすればその教師に自分の日本語学習における完成形を見て取ることができるのではないか。その場合、学習者の向上心や意欲は格段に変わってくると思われる。

国内と国外の学習者を比較すると幾つかの点を除き国内の学習者の方が日本語学習の環境に恵まれている。それは、本稿のテーマである“外来語”に関しても同様で、学習者はどれだけ日本人が好んで“外来語”を使用しているか、どういった使用法や発音をするのかなど様々な情報を身をもって体験し、習得することができるからである。だからこそ国外の学習者もだが、国内の学習者に“外来語”に対する考えを出してもらい、学習者にとっても母語話者にとってもより良い日本語を歩んでいければと考える。筆者の今後の課題としたい。

- 1) 本稿は2007年宇都宮大学大学院国際学研究科に提出した修士論文に加筆修正したものである。ご指導いただいた吉田教授、調査にご協力いただいた多くの方々に謝意を表したい。
- 2) 『言語学大辞典』（三省堂、1988、196-197）第6巻によれば、「日本の外から来た語」の意「完了の時称をもってとらえられた外国語の語彙をいう日本に固有の歴史的概念」である。
- 3) 古代から日本は中国との政治的経済的文化的な繋がりにより、多くの言葉がこれを表象する漢字と共に日本語に流入して来た。それらは今日の日本語の基本語彙の中でも数詞や慣れ親しんでいる慣用表現など不可欠な部分を占めており“漢語”という別称を当てられている。本稿では、これらの言葉と区別する意味で近代音の中国語に限定する。
- 4) 社会的要因から優れていると考えられる方言を“標準語”とし、それ以外を“地域方言”として捉えるもの。
- 5) [disuku] の日本語音「u」の音は本稿では“u”で表記する。
- 6) “外来語”を東洋外来語と西洋外来語の2種とする捉え方もある。
- 7) 国内の大学、高校、専門学校の卒業者数は1901～39年で1万名以上に達したとされている。
- 8) 長沼直兄が1923年より開始し、この際に作成した教材が後の31年『標準日本語教育読本』として出版された。
- 9) 国立国語研究所 第11回国際シンポジウム『世界の〈外来語〉の諸相』より相沢正夫氏の講演「日本における「外来語」の状況」の報告書から抜粋。
- 10) 国立国語研究所の提案する言い換え語の理解率順のリストについては [http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/Teian1\\_4/iikaegotou\\_rikaido.html](http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/Teian1_4/iikaegotou_rikaido.html)参照。
- 11) 平成14年の外来語委員会発足以降現在までに4回の言い換え提案が提示され、詳細では国立国語研究所のHPで示されている。
- 12) <http://www.kokkoken.go.jp/public/gairaigo/>参照
- 13) “外来語”の出自の多くが英語であるため和製英語と称されている。
- 14) 「スキニシップ」は「スキン（自立語）」と「シップ（接尾辞）」という文法にのっと

ってできている稀な組み合わせである。

- 15) <http://web.ydu.edu.tw/~uchiyama/data/index.html>参照
- 16) <http://www.moj.go.jp/PRESS/060406-1/figure01.html>参照
- 17) [www.jpj.go.jp/j/about\\_j/press/dl/0145.pdf](http://www.jpj.go.jp/j/about_j/press/dl/0145.pdf)参照
- 18) 但し、この表記という点に関して言えば、現在一定の基準が国によって設けられており、あまり大きな問題とならないと思われる。
- 19) しかし実際に日本語ではTVゲームの中にさえそうした表現が出てきている。このように使用されれば、子どもは知らず知らずのうちにこの日本で作り上げられた意味の方を覚えてしまう。
- 20) 「ライフライン」は外来語の言い換えリストに入っており通常「生活線」と訳される。その他、命をつなぐものという意味で「生命線」、それらを比喩的に表す場合は「命綱」、電気・ガス・水道などの供給路であることを明確にする場合は「光熱水路」となる。この言葉は日本語に浸透しており先の調査からも高い定着度が見られるが、高齢者層での定着度が少ないことから、言い換え案に盛り込まれたものと思われる。
- 21) 一般的にはフィリピン語とタカログ語は同義に考えられているが、実際にはタカログ語の一方言を政府が標準語として定め、1987年にフィリピン語として国語化した。
- 22) 呼称は地域により若干異なる。ビサヤ語、セブ語などある。
- 23) 別の捉え方もあり、そちらの場合は170種になる。
- 24) オーストロネシア語属に分類される
- 25) 本稿末に添付資料として一部を掲載
- 26) 現在ではヘボン式（標準式）、日本式、訓令式の3種がある。
- 27) 勿論、そうした違和感を強く覚えさせるかどうかは彼ら個々の日本語運用能力によるものである。ある教師のそれは非常に高く日本人のそれと大差なく、日本人とのコミュニケーションも非常にスムーズに行えるほどである。しかし、そのように高い日本語運用能力を有する人でも時折アクセントがおかしくなったり、未だに発音が不明瞭であったり、口頭表現が不自然になる場合も見受けられた。
- 28) 中世の探検家マゼランの来航を経て、16世紀以降スペインの統治領となり、その後米西戦争の結果からアメリカ領になり、終戦後の1946年に独立を果たしている。また、げん国名である“フィリピン共和国”は当初の領主国であったスペイン国王フェリーペ2世の名前に因むものとされている。
- 29) 一般的な表記のされ方も同様で“a”、“e”、“i”、“o”、“u”となる
- 30) 最後の1つは活字の問題のため本稿では“?”で表記する。子音の別のカウントの仕方の場合には“p,t,k,b,d,g,m,n,ng [ʔ],s,h,w,r,l,y [j]”（※字には書かれないが声門閉鎖音もある）の15種（16種）になる

## 引用文献

### webサイト

文化庁HP国語政策施策情報システム 内閣告示・内閣訓令 外来語の表記

<http://www.bunka.go.jp/kokugo/frame.asp?tm=20060606185757>

平成14年度「国語に関する世論調査」の結果

[http://www.bunka.go.jp/1kokugo/14\\_yoron.html](http://www.bunka.go.jp/1kokugo/14_yoron.html)

各期国語審議会の記録 第22期国語審議会

<http://www.bunka.go.jp/kokugo/main.asp?fl=list&id=1000000520&clc=1000000500>

国立国語研究所\_「外来語」言い換え提案に関する概要、リスト、等

[http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/Teian1\\_4/index.html](http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/Teian1_4/index.html)

国際交流基金HP 「海外における日本語教育」

[http://www.jpf.go.jp/j/japan\\_j/oversea/index.html](http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/index.html)

日本語能力検定試験

[www.jpf.go.jp/j/about\\_j/press/dl/0145.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/about_j/press/dl/0145.pdf)

国際交流金日本語国際センターHP 日本語教材サイト「みんなの教材サイト」

<http://momiji.jpf.go.jp/kyozai/index.php>

法務省入国管理局

<http://www.moj.go.jp/PRESS/060406-1/figure01.html>

## 引用図書・文献

あらかわ そおべえ（1986）『外来語概説』（株）名著普及会

石田 敏子（2000）『改訂新版 日本語教授法』

石野 博史（1983）『現代外来語考』大修館書店

石綿 敏雄（1983）『外来語と英語の谷間』秋山書店

—————（2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版

亀井 孝ほか（1988）『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂

—————（1988）『言語学大辞典 第2巻 世界の言語編』三省堂

国際交流基金・日本国際教育協会（1994）『日本語能力検定試験出題基準  
[改訂版]』凡人社

国立国語研究所（1984）『語彙の研究と教育 上下巻』大蔵省印刷局

—————（1990）『日本語教育指導参考書16 外来語の形成とその教育』  
大蔵省印刷局

—————（1994）『現代雑誌の語彙調査 - 1994年発行70誌 -』国立国語研  
究所

———— (2005)『世界の〈外来語〉の諸相 標準化・活性化を目指す言語政策の多様性』国立国語研究所

———— (2006)『新「ことば」シリーズ19 外来語と現代社会』国立国語研究所

斎藤 純男 (2002)『日本語音声学入門』

社団法人 日本語教育学会 (2005)『新版 日本語教育事典』大修館書店

馮 富榮 (1999)『日本語学習における母語の影響 ―中国人を対象として―』風間書房

彭 飛 (2003)『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴』凡人社

## 日本語教材

スリーエーネットワーク (2002)『みんなの日本語 1』スリーエーネットワーク

———— (2002)『みんなの日本語 2』スリーエーネットワーク

坂野 永理ほか (2003)『げんき 1』The Japan Times

———— (2003)『げんき 2』The Japan Times

青木 晴夫ほか (2000)『Basic structures in Japanese』大修館書店

Nagara, Susumu (1990)『Japanese for Everyone』Gakken

名古屋大学日本語教育研究グループ (2002)『A Course In Modern Japanese』名古屋大学出版